

海外展開と文理融合の道を求めて

平成 25 年 3 月 5 日

社会性認識と自閉症スペクトラム障害に関する文理融合型研究の海外展開プログラム

代表者・柴田正良（人間科学系教授：哲学）



本事業は、以下の「事業概要」に詳しく述べられているように、21 世紀 COE プログラム「発達・学習・記憶と障害の革新脳科学の創成」（平成 16～20 年度）の後継事業である本学重点研究プロジェクト「社会性認識と自閉症スペクトラム障害に関する文理融合型研究」の若手研究者による海外展開を目的として、平成 22 年 3 月より開始され、平成 25 年 2 月に終了したものである。

したがって、本事業の成果はまさしく、この研究分野のいかに多くの若手研究者が海外の先進的な大学・研究機関に学び、いかに多くの貴重な知見を得て戻って来たのか、という点で測られるべきである。これに関しては、全体の派遣者総数 47 人（延べ人数）、長期派遣者数 14 人という実績と、この報告書にまとめられた帰国報告（成果報告）をご覧頂ければ、まずは満足すべき結果を得られたと行うことができよう。

しかしながら、この事業の母体となったプログラムの本旨である「文理融合型研究」の推進という点ではどうであったろうか？ 「文理融合」は言うは易く行うは難し、ということをもたしても実感させられた、というのが正直な反省である。例えば、医学系や理学系の若手研究者が社会学や政治学、倫理学の分野に学びに行くことも、また逆に、哲学や社会学の若手研究者が医薬系の分野に学びに行くことも殆どなかったのが実態である。それぞれの「伝統的」な研究分野の垣根にほぼ忠実に、彼らは海外に赴いたのである。もちろん、きわめて高度化、専門化、そして巨大化が進んだ現代科学の最前線において、異なった分野のリテラシーをきちんと備えるだけでなく最新のテーマにおいても当該の研究者と渡り合える、という能力を身につけることは至難の業であろう。しかし、自閉症問題の全体像の解明のようなテーマにおいては、そうした文理融合型研究が他にもまして求められているのであり、また逆に「文理融合」がなければ、こうした複雑極まりない問題の研究において、真のブレークスルーは生まれまいであろう。

この点で、私事に渡った話で恐縮であるが、先日、大阪大学のグローバル COE「認知脳理解に基づく未来工学創成」（拠点リーダー・石黒浩教授）のテーマ別創成塾「ロボット工学と倫理」に招かれて講演したとき、そのような「文理融合」の新しいイメージを垣間

見ることができた（ように思った）。当方がにわかにはメンバーを見分けられないこともあろうが、およそ狭い研究室にギュウ詰めになった若者たちは、文系も理系もなく、互いに越境し合う言葉と感覚で自在に議論を仕掛けてくるように見えた。文系の若手研究者は日夜ロボット制作の現場を目の当たりにし、理系の研究者はいつも哲学や心理学の議論を傍らで聞かされている、というような姿を想像したが、それは一瞬の幻覚にすぎなかったのか？

いずれにせよ、専門分野別の分化がここまで進んだことにはそれなりの必然性があるのだから、性急に「文理融合」を求めることには無理があるし、そこに至る道筋にしても「こうでなければならぬ」という型があるわけでもないだろう。われわれの事業で海外に飛躍した多くの若手研究者も、今はまだ形をなさぬ可能性であっても、やがてその成果を生かして、この分野にふさわしい「文理融合研究」を花開かせてくれると期待したい。そのときこそが、本事業の本当の終了の時である。